様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18720062
研究課題名（和文）大戦（間）期英国文学・文化における第一次大戦後遺症の研究：身体・性認識を中心に
研究課題名（英文）A Study of the Aftereffects of the First World War in English Literature and Culture between the Wars: the Perception of Sex and the Body

研究代表者
霜鳥　慶邦（SHIMOTORI YOSHIKUNI）
福島大学・人間発達文化学類・准教授
研究者番号：10400582

研究成果の概要：本研究は、D. H. Lawrence 文学を中心に、大戦（間）期のイギリス文学・文化における第一次大戦の衝撃・影響について分析した。文学、文化、政治、社会、医学、精神分析学などの多分野の学際的研究をとおして、特に身体認識と性認識が大戦の衝撃によって劇的に混乱・変化していく様子――本研究では、この現象を「大戦後遺症」と呼ぶ――を明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,300,000	0	1,300,000
2007 年度	1,200,000	0	1,200,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	270,000	3,670,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：英米文学、第一次大戦、D. H. ロレンス、身体、性

１．研究開始当初の背景

(1) 本研究は、D. H. Lawrence 文学の歴史的研究の発展的延長線上に位置している。Lawrence の代表作 *Lady Chatterley's Lover* を歴史的に考察するうえで最重要事件である第一次大戦についての研究を進める過程で、「第一次大戦後遺症」とでも呼ぶべき「病」が、大戦間期イギリス文学・文化に多大な影響を与えている様子が徐々に見えてきた。そこで、研究の焦点を Lawrence 文学から第一次大戦にシフトさせ、大戦がその後の文学・文化に残した様々な「後遺症」を明らかにする必要性を強く感じた。本研究は、以上のような動機が出発点となっている。

(2) 大戦（間）期文学研究では、「戦争詩人」に関する研究をはじめとし、女性の存在に注目した研究、さらに大戦と様々な芸術様式（小説、詩、演劇、映画）との関係に関する研究など、様々な角度からの考察が行われ、第一次大戦とイギリス文学・文化の関係の様々な側面が明らになってきている。しかしその一方で、さらなる考察が必要な点が残っているのも事実である。本研究は、大戦（間）

期文学・文化を、「大戦後遺症」として、つまり「病」としてとらえ直すことで、従来の「表象」・「現象」論では光が当たらなかった「認識」論的レベルにおける大戦の衝撃を明らかにしたいという動機によるものである。

２．研究の目的

(1) D. H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover* を大戦間期という歴史的コンテクストの中で考察する。特に、テクストにおける身体・性認識における「大戦後遺症」を診断する。

(2) 大戦から現代までの大きな歴史的枠組みの中に大戦（間）期を置きなおすことで、大戦（間）期イギリス文学・文化の歴史的相対化を行い、この時代の特徴を解析する。

(3) 身体・性認識の研究を中心としつつ、「大英帝国」という歴史的状況、「ツーリズム」という文化状況、Wagner 芸術受容、ファシズム文化などを射程に含めてより包括的・多角的に大戦（間）期イギリス文化を考察することで、当時の文化の諸相を明らかにする。

３．研究の方法

(1) 第一次大戦の先行研究を整理し、その盲点と批判・修正すべき点を明確化する。特に次のテーマを重点的に考察する。
①医学・精神分析学・文化・文学におけるシェル・ショック認識について。
②塹壕世界における身体認識について。
③戦争詩人を中心とする大戦文学の先行研究の整理・再検討。

(2) 大戦（間）期文学における身体・性認識を分析する。先行研究と一次資料を基に行う。特に次の点を重点的に研究する。
①*Lady Chatterley's Lover* を中心とする Lawrence 文学における身体・性認識と「大戦後遺症」との関係。
②Lawrence 以外の大戦（間）期文学テクストにおける身体・性認識。
③大戦（間）期イギリスにおけるシェル・ショック認識の変化。
④負傷兵をめぐる社会的・政治的・医学的言説。

(3) ロンドンの Imperial War Museum や Lawrence の故郷 Eastwood を中心に現地資料調査を行い、より実証的な研究を目指す。

(4) 大戦（間）期イギリス文化の広範的・多角的考察。
①大英帝国研究の成果と「大戦後遺症」研究の接続の可能性の検討。
②ツーリズム研究の成果と「大戦後遺症」研究の接続の可能性の検討。
③イギリス文学・文化における Wagner 受容の研究。
④大戦（間）期イギリスにおけるファシズム文化の研究。

(5) 大戦から現代までの大きな歴史的枠組みを設置する。先行研究の成果を踏まえつつ、現代文学作品を調査・収集し研究対象として含めることで、歴史的考察のための基本的枠組みを強化する。

４．研究成果

(1) D. H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover* を、「大戦後遺症」という文化的コンテクストの中で――特に、大戦（間）期イギリスにおけるファシズム文化、Wagner 受容との関係において――考察した。まず、Wagner の芸術と思想がドイツ・ナチスの政治思想に吸収されていく過程を確認した。一方、当時のイギリス文学・芸術を広く考察することで、イギリス文学・芸術に Wagner の芸術と思想が、ドイツの場合とは大きく異なるかたちで受容されていく様子を確認し、さらに、イギリス化された Wagner 芸術・思想が、当時のイギリス・ファシズム文化とどのような関係にあるのかを明らかにした。このような文化的ダイナミクスの中に *Lady Chatterley's Lover* を置きなおし、大戦後遺症、Wagner 文化、ファシズム文化の観点から再考した。この研究は、ドイツとイギリスにおけるファシズム文化の差異を明らかにすると同時に、イギリス国内におけるファシズム文化の多様性を明らかにした点で、文学研究のみならず、文化・歴史研究にも大きく貢献できる成果であると考えられる。

(2) 大戦（間）期イギリスにおける「旅」文化を研究射程に含め、当時の文化をより多角的・包括的に考察した。まず、ツーリズム言説が当時の旅行記だけでなく文学テクストにも深く浸透していること、また、例えば Siegfried Sassoon, *Memoirs of an Infantry Officer* のような第一次大戦テクストにもツーリズム言説が深く関与している様子を確認した。このようなツーリズム言説のコンテクストの中に D. H. Lawrence, Edith Wharton, Evelyn Waugh の旅行記を置き、各自の旅戦略を比較検討した。Lawrence と Wharton の旅戦略が「ツーリズム／反ツーリズム」という二項対立的枠組みから脱却できていないのに対し、Waugh の旅戦略がツーリズム的枠組みを内部から解体し、いわば「ポスト・ツーリズム」と呼ぶべき段階へと移行していく契機を示していることを明らかにし、Waugh の旅戦略の時代的先駆性を証明した。本研究成果は、旅行記を旅人の自

己探求書ととらえる伝統的鑑賞（感傷）的読みでも、近年のポストコロニアル的視座からの考察でもなく、「ツーリズム／反ツーリズム／ポスト・ツーリズム」という新たなアプローチによる旅行記研究であり、このアプローチによって、従来の研究では光が届かなかった旅文化の一側面に光を当て、再考することができた。また、「ツーリズム／反ツーリズム／ポスト・ツーリズム」が複雑に交錯する大戦（間）期が、「旅」という観点においても注目に値する重要な時代であることを指摘することができた。

(3) 大戦（間）期イギリス文学・文化を「大英帝国」という歴史的コンテクストの中で考察した。具体的には、D. H. Lawrence, *St Mawr* を主な考察対象とし、このテクストにおけるアメリカ表象を、従来の研究が注目してこなかったアジア表象との関係において分析することで、次の点を明らかにした。
①*St Mawr* のアメリカ表象が、植民地インドのナショナリズム運動の脅威の記憶にとり付かれていること。そこに、植民地支配をめぐる帝国の不安と欲望を確認できること。
②*St Mawr* のテクストには、激動期の帝国の、不安と欲望の混沌とした流れの痕跡が確認できること。そして、*St Mawr* の世界地図は、不安定な時代状況から生まれた帝国の幻想であり、幻想の帝国であること。
　この研究成果によって、従来の「イギリス／アメリカ」という単純な二項対立的読みの無効性を証明できた。また、大戦（間）期の大英帝国の政治的不安が *St Mawr* のテクストに兆候的に現れる様子を証明したことにより、同様の分析方法で当時のイギリス文学を再解釈していくことが可能になると思われる。

(4) 研究射程を現代にまで拡大し、大戦の記憶の現代的意味を考察すると同時に、「大戦（間）期」という時代を現代的視点から逆照射することで、その相対的特徴について分析した。主に次の点を明らかにした。
①第一次大戦のイメージを、Sassoon, Owen, Graves といった一部の戦争詩人の作品に求める伝統的大戦観を批判し、大戦（間）期における戦争認識の多種多様性の復元をできるかぎり行った。そして大戦（間）期における多種多様な戦争認識が均質化・神話化されていくうえで、1960 年代のイギリス文化が決定的な役割を果たしたという事実に基づき、この時代における神話形成の文化的力学を解析した。
②第一次大戦での塹壕戦を生き抜き、現在生存する唯一の元英国陸軍兵士（いわゆる‘the last Tommy’）Harry Patch の歴史的・文化的象徴性について考察した。Patch の自伝 *The Last Fighting Tommy* (2007) が、大戦体験者の「証言」ではなく「神話的物語」としての特徴が極めて強いテクストであることを明らかにした。また、桂冠詩人 Andrew Motion による詩‘The Five Acts of Harry Patch’(2008)によって、Harry Patch 自身が文学的・神話的象徴と化していく様子を明らかにした。イギリス文学・文化研究、第一次大戦研究において、まだ本格的に研究されていない Harry Patch に着目し、その現代的象徴性を解析したこの研究成果は、今後の文学・文化研究、第一次大戦研究の発展に大きく貢献すると考えられる。
③現代イギリス文学における第一次大戦のイメージの特徴について考察した。Pat Barker, *Life Class* (2007), Theresa Breslin, *Remembrance* (2002)などのテクストにおいて、非常に類似した物語パターン（ドーヴァー海峡によって引き裂かれる恋人・家族、海峡を挟んで交換される多くの書簡、年齢あるいは身分を偽ってまで海峡を渡る女性、恋人同士の再会など）が循環していることを確認した。また、ドーヴァー海峡が、戦争詩人にとっては戦場の兵士と母国の人々の間の認識的断絶を象徴していたのに対し、現代文学では、恋人・家族を引き裂き悲劇的物語を創作するための舞台装置と化している点を明らかにした。また、現代文学（例えば Sebastian Faulks, *Birdsong* [1993]）において、ドーヴァー海峡が、現代と大戦期の世代間の断絶を象徴していること、そして海峡を渡る行為が、現代と過去の世代的・歴史的連続性の修復行為という象徴的意味を有していることを明らかにした。この研究成果を踏まえることで、現代における大戦の記憶の意味を明確にすることができるだろう。また、現代にまで続く大戦文学の系譜の研究へと発展させることができるだろう。

(5) D. H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover* を中心に、大戦（間）期イギリス文学における「大戦後遺症」を、「身体」・「性」認識を中心に分析し、以下の点について明らかにした。
①シェル・ショック的症状（反復的悪夢など）が、大戦（間）期イギリス文学において、（登場人物レベルではなく）テクスチュアリティのレベルにおいて現れていること。
②塹壕の泥世界の身体感覚が、大戦（間）期イギリスの、表面的には戦争とは無関係に見える文学テクストにおける身体・性認識にも多大な影響を及ぼしていること。
③大戦（間）期イギリス文学における「風景」描写に、塹壕風景のトラウマ的記憶が大きく影響を与えていること。
　Lady Chatterley's Lover と第一次大戦のトラウマ的記憶の関係を指摘したこの研究

成果によって、本テクストの徹底的な歴史的再解釈の可能性を大きく切り拓くことができると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）
①霜鳥慶邦、「〈海外新潮〉大戦文学の系譜学へ向けて」、『英語青年』、154 巻 10 号、2008 年、44 頁、査読無（原稿依頼）。
②霜鳥慶邦、「〈海外新潮〉The Last Tommy's 100th Birthday」、『英語青年』、154 巻 7 号、2008 年、45 頁、査読無（原稿依頼）。
③霜鳥慶邦、「〈海外新潮〉作家の授業と「世界」の視座」、『英語青年』、154 巻 4 号、2008 年、53 頁、査読無（原稿依頼）。
④霜鳥慶邦、「〈海外新潮〉第一次大戦と起源／期限なき記憶」、『英語青年』、154 巻 1 号、2007 年、50-51 頁、査読無（原稿依頼）。
⑤霜鳥慶邦、「ベデカー時代の世界を旅するには――20 世紀前半地中海世界の旅戦略」、『英語青年』、153 巻 8 号、2007 年、24-28 頁、査読無（原稿依頼）。

〔学会発表〕（計 2 件）
①清水知子、荒木正純、川田潤、霜鳥慶邦、「〈シンポジウム〉トラベル・ライティングの行方」、2007 年度大塚英文学会、2007 年 4 月 1 日、筑波大学大塚キャンパス。
②木下誠、中山徹、加藤洋介、井出あかね、森川真吾、霜鳥慶邦、「〈シンポジウム〉ロレンスとファシズム的文化」、日本ロレンス協会第 37 回大会、2006 年 6 月 24 日、慶應義塾大学。

〔図書〕（計 1 件）
①富山太佳夫、立石弘道、宇野邦一、巽孝之、大田良信、新井英永、木下誠、霜鳥慶邦、『D.H. ロレンスとアメリカ／帝国』、慶應義塾大学出版会、2008 年、総 313 頁、担当 179－208 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
霜鳥　慶邦（SHIMOTORI YOSHIKUNI）
福島大学・人間発達文化学類・准教授
研究者番号：10400582